

オセアニア[豪州]

1 農・畜産業の概況

豪州の農業は、実質国内総生産(GDP)の1.9%、就業人口で2.3%と、産業全体に占める割合は必ずしも高くない(2012/13年度(7月~翌6月))。しかし、同年度の全輸出額に占める農業の割合は12.6%となっており、輸出産業の中で重要な位置を占めている。

豪州では、国土面積(7億7000万ヘクタール)の52%に相当する3億9700万ヘクタールが農業に利用されているが、その大半が牛や羊の放牧地となる自然草地および採草地であり、小麦などを栽培する耕地面積は、3160万ヘクタールにすぎない(2013年6月末現在)。

豪州の農場数は、2012/13年度は12万8917戸(前年度比5.0%減)となった。2010/11年度から2011/12年度にかけては、比較的良好な気象条件や牛肉・小麦の輸出価格の上昇などにより農場数は増加したものの、2012/13年度は再び減少に転じた。また、農業従事者数は、高齢化による離農などにより、減少傾向で推移している(表1)。

経営形態では、肉牛、羊、酪農などの専業経営のみならず穀物などの複合経営も多いことから、農業従事者全体の約8割が、何らかの形で畜産経営に携わっているとみられる。

表1 農場数などの推移

(単位: 戸、千人、豪ドル)

区分/年度	2008/09	2009/10	2010/11	2011/12	2012/13
農場数	135,996	134,184	135,447	135,692	128,917
農業従事者	362.6	368.6	349.8	334.6	321.1
1農場当たり農業粗所得	78,980	59,470	120,870	112,200	111,400

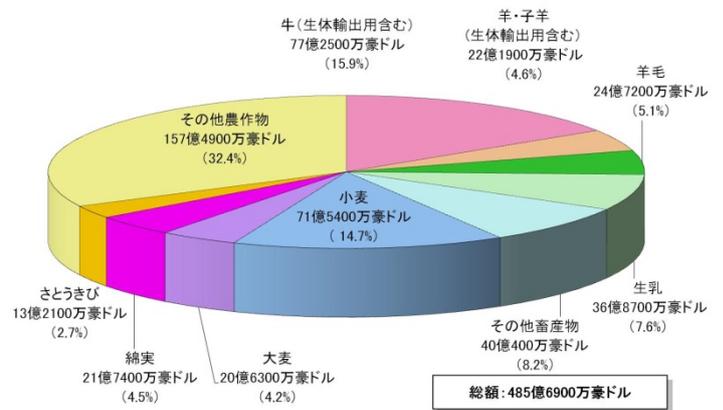
資料: ABS「Land Management and Farming in Australia, 2012-13」
 ABARES「Agricultural Commodity Statistics 2013」、
 「Australian Farm Survey Results」

注1: 農場数、農業従事者数は各年6月末時点
 注2: 農場施設評価額2万2500豪ドル以上の農場
 注3: 2012/13年度は暫定値

農業粗生産額は、2000年以降、おおむね増加傾向で推移し、2012/13年度は485億6900万豪ドル(同1.2%増)となった(図1)。

内訳を見ると、牛(生体輸出用を含む)が77億2500万豪ドル(同0.8%減)、羊が22億1900万豪ドル(同23.5%減)と、ラム価格の下落や生体牛および生体羊の輸出減を反映して減少し、生乳についても、減産と乳価の下落から36億8700万豪ドル(同7.5%減)となった結果、畜産物は全体で201億700万豪ドル(同5.1%減)となった。一方で、農作物は、小麦や大麦などがおおむね減産したにもかかわらず国際価格が高騰したことから、全体で284億6100万豪ドル(同8.4%増)となった。

図1 農業粗生産額(2012/13年度)



資料: ABARES「Agricultural Commodities」

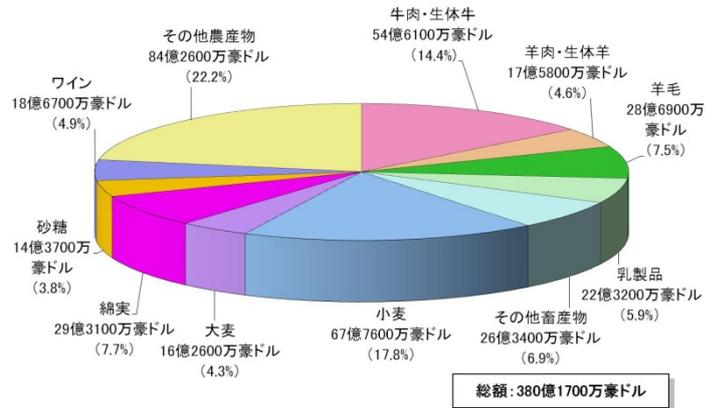
注1: 年度は7月~翌6月

注2: ABARESによる推計

一方、2012/13年度の農産物総輸出額(FOB)は380億1700万豪ドル(同4.6%増)となり、うち畜産物輸出額は149億5400万豪ドル(同1.5%増)と、わずかながらも増加した。

内訳は、牛肉・生体牛が54億6100万豪ドル(同6.7%増)、羊肉・生体羊が17億5800万豪ドル(同0.5%減)、牛乳・乳製品が22億3200万豪ドル(同2.7%減)となった(図2)。

図2 農産物総輸出額(2012/13年度)



資料: ABARES 「Agricultural Commodities」

注: 年度は7月～翌6月

2 畜産の動向

(1) 酪農・乳業

豪州の酪農は、放牧を主体とする経営が大部分であり、気候条件に恵まれ、牧草の生育が良いビクトリア(VIC)州を中心に行われてきた。ただ、最近では、度重なる干ばつを経て、穀物や乾草などの購入飼料の利用も多くなっている。

また、生産される生乳の約7割が加工向けであり、さらに、製造される乳製品の約6割が輸出向けという、輸出指向型の産業である。

以上のことから、生乳生産は、天候や牧草の生育状況などによって大きく変動するとともに、酪農経営は、乳製品の国際市況および為替変動の影響を受けやすいという特徴がある。

① 主要な政策

デーリー・オーストラリア(DA)が生乳の販売時に課される生産者課徴金などを財源に、販売促進や研究開発、マーケット情報の提供などを一括して行っている。

② 生乳の生産動向

乳用経産牛の飼養頭数は、2008年以降、おおむね安定的に推移しており、2013年は、165万頭(前年比1.2%減)となった(表2)。一方、酪農家戸数は、長期的に減少

傾向にあり、2013年は6398戸(同5.5%減)となった。なお、1戸当たり経産牛飼養頭数は、大規模で効率的な農家への集約という傾向が続いており、2013年には258頭(同4.5%増)となっている(図3)。

表2 乳牛飼養頭数などの推移

(単位:千頭、戸、頭)

区分/年	2009	2010	2011	2012	2013
乳牛飼養頭数	2,612	2,542	2,570	2,733	2,884
経産牛飼養頭数	1,676	1,596	1,589	1,670	1,650
酪農家戸数	7,924	7,511	6,883	6,770	6,398
一戸当たり経産牛頭数	212	212	231	247	258

資料: ABARES 「Agricultural Commodity Statistics 2013」、
Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus」
注: 各年6月末時点

図3 酪農家戸数と1戸当たり経産牛頭数の推移



資料: Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus」

生乳生産量は、1990年代から2000年代初頭までは、ガット・ウルグアイラウンド合意に伴う乳製品輸出拡大への期待などを背景に、増加傾向で推移してきた。しかしながら、2002/03年度から2009/10年度までは、干ばつなどの影響により減少傾向で推移した。2010/11年度、2011/12年度は気象条件の好転などから2年連続で前年度を上回ったものの、2012/13年度は、乾燥気候の影響から、920万キロリットル(前年度比3.0%減)と、やや減少した。

経産牛1頭当たり乳量については、放牧に適した品種へと改良が進められたこともあり、日本や米国などと比較してそれほど多くない。しかし、最近では、乳牛の遺伝子研究や、補助飼料供給体制の進展により着実に増加している。ただし、2012/13年度は、乾燥気候による牧草の生育悪化から、5389リットル(同3.4%減)と、やや減少した(図4)。

図4 生乳生産量と経産牛1頭当たり乳量の推移



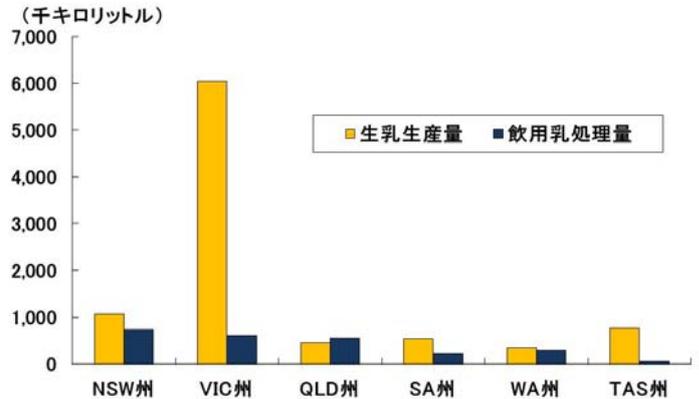
資料: ABARES 「Agricultural Commodity Statistics 2013」
注: 年度は7月～翌6月

加工用に仕向けられる生乳の割合は、乳製品の輸出拡大に伴って徐々に上昇し、2004/05年度には生乳生産量の8割程度を占めた。しかし、最近では国内の飲用乳需要が堅調であることなどから、2012/13年度の加工向け割合は、73.4%となっている。

生乳生産量を州別に見ると、VIC州が全体の65.6%を占め、豪州最大の酪農地域となっている。一方、飲用乳向けの生乳処理量は、大消費地であるシドニーを擁するニューサウスウェールズ(NSW)州が最も多く、次にVIC州、クイーンズランド(QLD)州となっている(図5)。

このように、生乳生産に占める飲用向けの割合が州により大きく異なるため、乳業メーカーごとの生産者乳価については、飲用向け割合が高い地域とそれ以外の地域とでは、大きな差が生じている。

図5 州別生乳生産量(2012/13年度)



資料: Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus」
注1: 年度は7月～翌6月
注2: 飲用乳処理量は州間移動を含む

③ 牛乳・乳製品の需給動向

2012/13年度の主要乳製品の生産量は、生乳生産の減少を背景におおむね前年度を下回っている。バターオイルは1万9200トン(前年度比0.2%増)と前年並みであったものの、バターが9万9000トン(同1.5%減)、チーズは33万8300トン(同2.4%減)、脱脂粉乳は22万4100トン(同2.7%減)、全粉乳は10万8800トン(同22.5%減)となった(表3)。

表3 牛乳・乳製品生産量の推移

(単位: 千キロリットル、千トン)

区分/年度	2008/09	2009/10	2010/11	2011/12	2012/13
生乳	9,388	9,023	9,100	9,480	9,200
飲用向け	2,229	2,269	2,316	2,388	2,451
加工向け	7,159	6,754	6,784	7,092	6,749
バター	109.8	100.1	96.3	100.6	99.0
バターオイル	38.7	28.2	26.2	19.2	19.2
チーズ	342.6	349.6	338.7	346.5	338.3
脱脂粉乳	212.0	190.2	222.5	230.3	224.1
全粉乳	147.5	126.0	151.3	140.4	108.8

資料: Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus」
注1: 年度は7月～翌6月
注2: 脱脂粉乳にはバターミルクパウダーを含む

2012/13 年度の主要乳製品の輸出量は、アジア諸国からの堅調な需要を背景に多くの品目で前年度を上回った。

2012/13 年度の乳製品生産量に占める輸出割合は、全粉乳は 95.0%、脱脂粉乳は 65.7%と、生産量の過半を占めている。また、バター（バターオイルを含む）、チーズについても、それぞれ 45.4%、51.6%と、50%前後の輸出割合となっている（表 4）。

乳製品の輸出は、日本、東南アジア、その他のアジア諸国（主に中国）向けの割合が高く、輸出額ベースで全体の 73%と、圧倒的なシェアを占めた（図 6）。特に粉乳類は、育児用粉ミルクなどの需要が多い中国および東南アジア諸国向けを中心に、脱脂粉乳、全粉乳ともに約 7 割はアジア地域向けに輸出されている。

表 4 牛乳・乳製品輸出量の推移

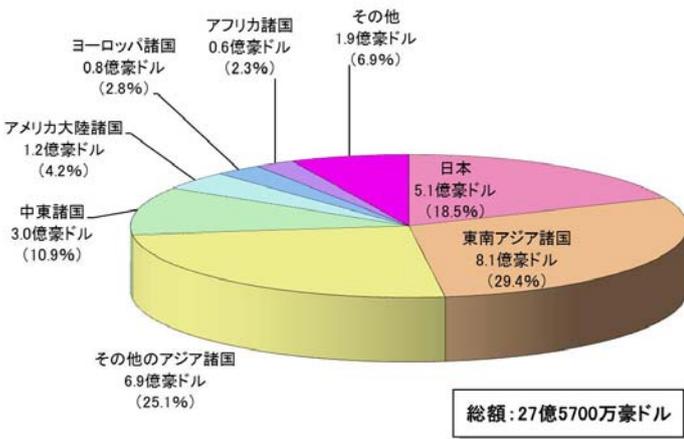
（単位：千トン、千キロリットル）

区分/年度	2008/09	2009/10	2010/11	2011/12	2012/13	輸出割合 (2012/13)
バター	44.0	41.7	33.4	33.8	39.4	45.4%
バターオイル	26.5	32.0	22.4	15.0	14.3	
チーズ	144.7	168.1	163.0	160.9	174.7	51.6%
脱脂粉乳	162.1	125.6	155.3	141.3	147.2	65.7%
全粉乳	158.0	116.7	125.9	116.1	103.4	95.0%
飲用乳	59.9	64.2	70.9	87.7	106.8	4.4%

資料：Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus」

注：年度は 7 月～翌 6 月

図 6 地域別乳製品輸出額（2012/13 年度）



資料：Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus」

牛乳・乳製品の国内消費量については、飲用乳は、カフェ文化の浸透による牛乳の間接消費や、量販店における低価格牛乳の販売を通じて日本よりも高く、2012/13 年度は、1 人当たり 107 リットル（前年度比 0.8%増）となった。

ヨーグルトは健康志向や簡便な朝食としての需要から同 7.6 キログラム（同 2.7%増）となった。一方、チーズは、同 13.5 キログラムと前年度並み、バターは、同 3.7 キログラム（同 5.1%減）と減少したものの、近年、おおむね安定的に推移している。

表 5 1 人当たり牛乳・乳製品消費量の推移

（単位：リットル・キログラム/人・年）

区分/年度	2008/09	2009/10	2010/11	2011/12	2012/13
飲用乳	103.8	103.8	104.5	106.1	107.0
チーズ	13.0	13.3	13.7	13.5	13.5
バター	4.1	3.9	3.9	3.9	3.7
ヨーグルト	6.8	7.2	7.3	7.4	7.6

資料：Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus」

注：年度は 7 月～翌 6 月

④ 乳価の動向

酪農・乳業は輸出依存型産業であることから、生産者乳価は、乳製品の国際市場の影響を強く受ける。2008/09 年度および 2009/10 年度は、世界金融危機（2008 年 9 月）以降の経済低迷などから、2 年連続で下落した。2010/11 年度は、乳製品の国際価格が堅調であったため上昇し、2011/12 年度も比較的高い水準が続いたものの、2012/13 年度は、乳製品の国際相場が軟調に推移したため、前年度比 4.3%安の同 40.2 豪セントとなった（表 6）。

表 6 生産者乳価の推移

（単位：豪セント/リットル）

年度	2008/09	2009/10	2010/11	2011/12	2012/13
生産者乳価	42.4	37.3	43.2	42.0	40.2

資料：Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus」

注：年度は 7 月～翌 6 月

(2)肉牛・牛肉産業

豪州の肉用牛生産は、酪農と同様、牧草(放牧)に依存しており、牛肉生産量の6割以上を輸出に仕向ける輸出依存型産業である。

肉用牛は、粗放的な飼養管理が可能のため、乳牛に比べると利用可能な草地の範囲が広いことに加え、熱帯・乾燥地域などの自然条件が厳しいところでも、これに適応する熱帯品種などを選択的に導入することによって飼養が可能となることから、内陸部の極端な乾燥地帯を除き、ほぼ豪州全土で、多種多様な品種による生産が行われている。

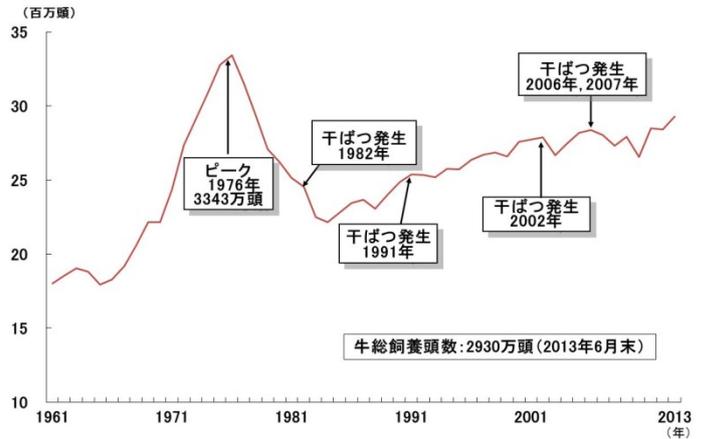
① 主要な政策

肉用牛や牛肉の需給管理を目的とした制度・政策は特になく、生産者は、国内外の市場動向を勘案しつつ経営を行っている。また、豪州家畜検疫検査局(AQIS)などの政府機関が家畜衛生政策を、豪州食肉家畜生産者事業団(MLA)などの業界団体が販売促進、研究開発、市場情報の提供などを行っているが、これらの事業財源の多くは、生体の取引(販売)時に課される生産者課徴金によるものである。

② 牛の飼養動向

豪州の牛飼養頭数(乳牛を含む)の推移を長期的に見ると、1960年代後半から70年代半ばにかけて、世界的な牛肉需要の増大を背景に急激に増加し、1976年には過去最高の3343万頭を記録した。その後、第二次オイルショック(1979年)などによる世界的な牛肉需要の減退や肉用牛経営の悪化、大干ばつの発生(1982年)などにより、1984年には2216万頭と、ピーク時に比べ3分の2まで減少した。それ以降は、主に干ばつなど天候の影響を受けながらも緩やかな増加傾向で推移している。

図7 牛飼養頭数の長期的推移



資料: ABARES「Agricultural Commodity Statistics 2013」(2012年以前)、
「Agricultural Commodities - September Quarter 2014」(2013年)
注 1: 乳牛を含む
2: 各年、6月末時点

2000年以降は、2002年および2006年から2008年にかけて大規模な干ばつが発生したが、2010年以降天候が回復し、2011年から2012年前半にかけては東部を中心にラニーニャによる降雨に恵まれたことから、生産者は雌牛や子牛を保留し、牛群再構築を行った。この結果、2011年には2850万頭超の高水準となった。

2012年後半以降は東部で再び気象状況が悪化したものの、2013年6月末時点の牛飼養頭数は2929万頭(前年比3.1%増)と過去35年間では最高となり、うち肉用牛は2646万頭(同3.0%増)となった(表7)。

表7 牛飼養頭数の短期的推移

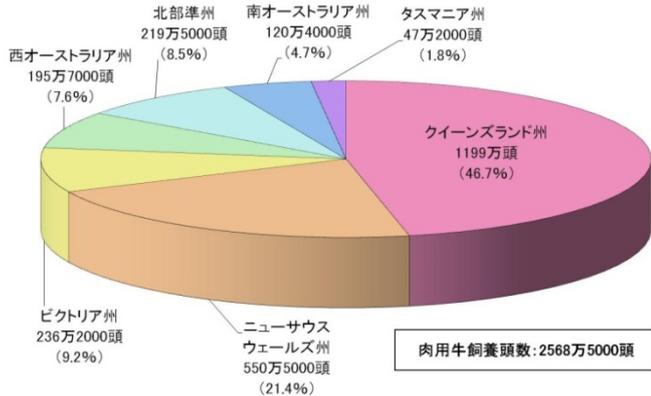
(単位: 千頭)

区分/年	2009	2010	2011	2012	2013
肉用牛	25,295	24,008	25,936	25,685	26,457
乳用牛	2,612	2,542	2,570	2,733	2,834
合計	27,907	26,550	28,506	28,418	29,291

資料: ABARES「Agricultural Commodity Statistics 2013」(2012年以前)、
「Agricultural Commodities - September Quarter 2014」(2013年)
注: 各年6月末時点

肉用牛の飼養頭数を州別に見ると、QLD州(シェア46.7%)、NSW州(同21.4%)、VIC州(同9.2%)の東部3州で全体の8割近くを占め、東部が肉用牛供給の根幹を成している(図8)。

図8 州別肉用牛飼養頭数(2012年6月末時点)



資料: ABARES 「Agricultural Commodity Statistics 2013」

③ 牛肉の需給動向

ア 生産動向

牛と畜頭数(子牛を含む)は、2006/07~2007/08年度の大干ばつによっていったん増加した後、天候の回復による牛群再構築から減少傾向にあった。しかしながら、2012年後半以降の気象状況の悪化を受けて、2012/13年度は845万7000頭(前年度比7.4%増)と、かなり増加した。

一方、平均枝肉重量は、2010年以降、降雨に恵まれて放牧環境が良好な状態となったことで、増加傾向で推移し、2011/12年度は過去最高となった。2012/13年度は、気象状況の悪化に伴って282.4キログラム(同1.9%減)と、わずかに減少した。

また、2012/13年度の牛肉生産量(子牛肉を含む。枝肉重量ベース)は、と畜頭数の増加を受けて、224万5000トン(同6.2%増)と、過去最高となった。

表8 牛肉需給の推移

(単位:千頭、千トン、キログラム)

区分/年度	2008/09	2009/10	2010/11	2011/12	2012/13
と畜頭数	8,583	8,364	8,097	7,873	8,457
生産量	2,125	2,109	2,133	2,115	2,245
平均枝肉重量	269.4	275.7	283.5	288.0	282.4
輸出量	968	899	937	948	1,014
1人当たり消費量	31.4	34.6	33.9	31.9	33.2

資料: MLA 「Statistical Review」

注1: 年度は7月~翌6月

2: 生産量および1人当たり消費量は枝肉重量ベース、
輸出量は船積重量ベース

3: と畜頭数には子牛を含む

4: 生産量、輸出量および1人当たり消費量は子牛肉を含む

5: 平均枝肉重量は成牛のみ

イ 牛肉輸出動向

2012/13年度の牛肉輸出量(船積重量ベース)は、過去最高の101万3900トン(前年度比6.9%増)となった。また、主要輸出先別では、最大の輸出先である日本向けが29万8800トン(同8.3%減)と減少した一方、米国向け20万6600トン(同0.7%増)、韓国向け13万7700トン(同12.1%増)といずれも増加した(表9)。

同年度は、1豪ドル当たり1.03米ドル(前年度比同)と、豪ドルの外国為替相場は前年度から引き続き高値で推移したが、QLD州を中心とした干ばつによる牛肉生産量の増加に伴う肉牛取引価格の下落によって、価格競争力が保たれたことが輸出増の要因となった。

また、主要輸出先以外では、2012年後半以降、急成長を見せた中国向けが9万2300トン(同12倍)、2012年末のブラジルにおけるBSE発生によって同国産の輸入を禁止したサウジアラビア向けが1万9000トン(同4倍)となった。牛肉輸出量が過去最高記録を更新した背景には、こうした新たな市場の成長もあるものとみられる。

表9 牛肉の国別輸出量の推移

(単位:千トン)

国名/年度	2008/09	2009/10	2010/11	2011/12	2012/13	輸出シェア (12/13)
日本	362.6	349.9	351.4	325.8	298.8	29.5%
米国	282.1	210.5	160.0	205.2	206.6	20.4%
韓国	113.0	123.9	139.2	122.8	137.7	13.6%
中国	4.1	4.3	7.2	7.7	92.3	9.1%
その他	210.0	214.8	286.7	294.4	278.5	27.5%
合計	967.7	899.9	937.3	948.3	1,013.9	

資料: 豪州農漁林業省(DAFF)

注1: 年度は7月~翌6月

2: 船積重量ベース

ウ 消費

豪州の1人当たり食肉消費量を見ると、近年、鶏肉の消費量が、他畜種と比べて安価であることや消費者の健康志向を受けて増加し、2000年代後半に牛肉消費量と逆転した。

2012/13年度は、鶏肉が44.1キログラムと前年度並みとなった一方、牛肉は33.2キログラムと、生産量の増加を

受けて増加した。豚肉は 26.0 キログラム、羊肉(マトン・ラム)が 9.9 キログラムとなった。

表 10 1人当たり年間食肉消費量の推移

(単位:キログラム)

区分/年度	2008/09	2009/10	2010/11	2011/12	2012/13
牛肉	31.4	34.6	33.9	31.9	33.2
マトン	1.4	1.0	0.5	0.1	0.3
ラム	10.7	10.2	9.0	9.3	9.6
豚肉	24.3	26.2	24.6	25.4	26.0
鶏肉	37.5	38.0	44.3	44.0	44.1
合計	105.3	110.0	112.3	110.7	113.2

資料:MLA「Statistical Review」

注 1:年度は7月～翌6月

2:牛肉には子牛肉を含む

① 生体牛輸出

生体牛輸出は、インドネシアなど東南アジア諸国向けの肥育もと牛が中心となっている。最大の輸出先であるインドネシア向けについては、経済成長の伴い増加を続け、2009/10年度には71万8100頭に達したが、同国が2010年から5カ年で実施する牛肉自給率向上プログラムにより、350キログラム未満の輸入体重制限や生体牛の輸入枠を設け、2012年にはこれを厳格化したため、2012/13年度には27万1300頭(前年度比27.9%減)と大きく落ち込んだ。これにより、同年度の総輸出頭数は63万3700頭(同7.3%減)となった。

一方、同年度は、イスラエル向けが6万7200頭(同11.1%増)、マレーシア向けが3万8500頭(同92.5%増)、フィリピン向けが3万7000頭(同54.7%増)と大幅に増加し、インドネシア向けの減少分を補う形となった。

表 11 生体牛の国別輸出頭数の推移

(単位:千頭)

国名/年度	2008/09	2009/10	2010/11	2011/12	2012/13	輸出シェア (12/13)
インドネシア	701.4	718.1	457.4	376.1	271.3	42.8%
イスラエル	27.7	36.4	53.4	60.5	67.2	10.6%
中国	16.0	53.3	50.9	58.9	59.2	9.3%
マレーシア	23.4	5.5	20.6	20.0	38.5	6.1%
フィリピン	10.7	14.8	15.9	23.9	37.0	5.8%
ロシア	13.8	9.4	18.4	36.9	36.3	5.7%
トルコ	-	1.2	104.4	37.4	35.6	5.6%
ベトナム	0.0	0.5	1.4	1.4	15.9	2.5%
エジプト	-	33.4	23.1	32.1	15.3	2.4%
日本	17.5	15.8	12.7	14.9	11.2	1.8%
その他	80.5	69.1	46.9	21.2	46.1	7.3%
合計	891.1	957.5	805.0	683.3	633.7	

資料:MLA「Australian livestock export industry statistical review」

注 1:年度は7月～翌6月

2:乳牛を含む

② 肉用牛価格の動向

2012年の家畜市場加重平均価格は、1キログラム当たり318.7豪セント(前年比4.6%安)と、過去最高水準となった前年から下落に転じた(表12)。これは、2012年後半以降、気象状況の悪化により、早期出荷が増加したことが要因である。特に、出荷が増加した経産牛は同277.4豪セント(同5.5%安)と最も下落幅が大きく、次いで、若齢牛が、放牧環境の悪化によるもと牛需要の低下から、同368豪セント(同4.6%安)となった。

表 12 肉牛価格の推移(枝肉換算)

(単位:豪セント/キログラム)

区分/年	2008	2009	2010	2011	2012
若齢牛	333.5	319.3	349.2	385.8	368.0
肥育牛	318.8	299.4	321.5	343.3	333.3
経産牛	267.8	252.8	272.2	293.4	277.4
加重平均	297.5	281.5	304.9	333.9	318.7

資料:ABARES「Agricultural Commodity Statistics 2013」

注 1:いずれも、主要家畜市場の価格

2:肥育牛は生体重500～600kg、経産牛は同400～520kg